

明代万曆時期における豊臣秀吉像

鄭 潔 西

一、はじめに

一五九二年（日本文禄元、朝鮮宣祖二十五、明万曆二十）四月十三日、日本の支配者豊臣秀吉は突然に大軍を発し朝鮮を侵犯した。それはすなわち「文禄・慶長の役」の始まりである。中国では「万曆朝鮮役」、韓国では「壬辰倭乱」「丁酉倭乱」と称される。朝鮮国は悲惨な蹂躪を受け、僅か半月で首都漢城は陥落した。二箇月後、北部の重要都市平壤も陥落した。¹朝鮮の惨敗を聞いた明朝は、日本の侵略に大きな衝撃を受け、朝廷全体が驚かさされ、初めて真剣に日本および秀吉のことを認識するようになった。

明朝人の秀吉に対する認識は、一年前の一五九一年（万曆十九）に遡る。その年の閏三月二十一日、一隻の琉球朝貢船が中国東南沿海の福建省漳州の六鯨山という港に風待ちのために入港した。乗船していた琉球使者と一名の中国海商が、実は重要な使命を帯びていた。彼らは、当時の日本を支配していた豊臣秀吉（以下秀吉と略称）の近況および彼が明朝を侵犯しようとしていた情報を明朝に将来したのである。そして、その陳申と名乗った中国海商はその日のうちに直ちに上

陸し、一刻も遅れず福建の省都福州へ情報の報告に向った。²しかし、陳申が辛うじて齎した日本と秀吉の情報は、当時の明朝官吏たちにあまり重視されなかった。そればかりではなく、陳申が持ってきた日本情報は「海外浪傳」の「訛言」と見なされ、陳申は「勾引煽禍害」の嫌疑で逮捕され、投獄された。³

その後、また秀吉および彼の「入犯大明」の他の情報が、別のルートによって続々と明朝に伝わった。そして、陳申も釈放された。⁴さらに、翌年四月から万曆朝鮮役が発生した後も、秀吉と日本に関する多くの情報が中国に続けて伝わり、秀吉と日本に対する明朝の認識が次第に強化されていったのである。

そこで本稿は、万曆朝鮮役前後の明朝に伝わった秀吉に関する情報および当時の文献に現われた秀吉像を考察し、更に当時の短編小説「斬蛟記」に見られる秀吉像を考証し、明代万曆時期において形成された秀吉の人物像を明らかにしようとするものである。

二、万曆時期の秀吉像に関する情報と文獻

はじめに触れたように、一五九一年（万曆十九）に初めて日本の秀

吉に関する情報が明朝に齎された。それらの秀吉情報は、万暦時期の重要な情報として当時の浙江総兵であった侯繼国の「全浙兵制」に詳しく載せられている。その後、万暦朝鮮役が興り、また複数のルートによっても多くの秀吉情報が明朝に渡った。特に明朝と日本が講和していた時に日本へ情報収集に派遣された明朝のスパイが齎した情報が最も信頼できると思われる。それらの重要な情報は、明朝国内に流伝し、文人たちに大きな影響を与え、更に多くの日本関係の著書に記された。それによって、明代万暦時期の秀吉像が浮き彫りになった。

(二) 万暦朝鮮役前夜の情報からみた秀吉像

(1) 琉球長史鄭迥の情報

一五九一年(万暦十九)、琉球船の渡来とともに明朝に伝わった秀吉情報は、明朝に齎された初期の秀吉情報と思われる。それらの情報は、当時の浙江総兵侯繼高の「全浙兵制」に書き写され、今日までその全貌が知られる。「全浙兵制」の「近報倭警」の冒頭に記されているのは、琉球通事鄭迥に託された琉球長史鄭迥の「為報國家大難事」という報告書である。その報告書には、当時の秀吉について次のように述べられている。

今倭王關白、日本六十六州兼併為一主、陰蕃席捲琉球・中國之心。萬暦十七年三月差人到國曰、天生一人、混一海内、為諸倭主、琉球蕞爾小國、可速奉朔獻地、無貽後悔。：關白自為天授、令六十六州造船、警言二萬隻、抽番二百萬、親督各王、擬今年三月入寇大明。

すなわち、現在の「倭王關白」は、日本を統一した後、戦艦を造船し、兵士を徴発して、「今年」つまり一五九一年(万暦十九)三月に明朝を入寇しようとしているという。ここに見られるように「倭王關白」に関する情報はまだ少なく、「倭王關白」の称呼から秀吉の名前さえはつきりされていなかったことが推察できる。

(2) 福建海商陳申の情報

同じ朝貢船に乗船して帰国した福建の海商陳申が齎した秀吉情報はより詳しく、彼の供述である「為疾報倭人傾國入寇事」によると、秀吉の情報は次の通りである。

今倭王關白、奮身奴隸、弑其王而奪之位、仍藉故主餘威、兼併日本六十六州之地為一。陰謀席捲琉球・朝鮮、併吞中國。：關白自為天授、令六十六州造船一萬隻、三丁抽一、計番二百萬、親督六十六州之主、擬今年三月入寇大明、入北京者令朝鮮為之向導、入福廣浙直者令唐人為之向導、聞唐人計二千人。十一月二十五日倭船至港報知、而琉球和尚差自日本回者亦如所云。

この秀吉情報は、上掲の鄭迥の「為報國家大難事」の内容に極めて近く、まるで両者が合意して作成したもののものである。ここに提供された情報も鄭迥のものと同じように、「倭王關白」という呼称を用いており、「秀吉」の名前はしるしていない。とはいえ、「倭王關白」の奴隸の出身、王様を弑して王位を篡奪した経緯など、前の情報より詳しくなっている。そして、明朝を侵略しようとする情報の中で、朝鮮人および日本に居住していた明朝人に侵略の案内をさせる計画の細部までも言及されている。

(3) 日本から逃げ帰った被擄人蘇八の情報

琉球船が到着した一箇月後、台州府臨海県出身で倭寇の被擄人になった蘇八が辛うじて故郷に逃げ帰った。

蘇八供稱：萬曆八年三月二十九日：駕漁船一隻、由海門關到于擄礁洋捕魚、于本年四月初一日遇有倭船一隻、將八等人船擄去：于萬曆十年間被陳公寺僧轉賣與地名對馬島走番漳州人曾六哥使喚、八日逐打柴種田賣布生理：方白古登乘見各國降服、意欲另造新船、糾合被擄唐人、充為向導、侵犯中國。：八思家有父母妻兒、于本年九月內附漳州客人振峯貨船至呂宋國、至萬曆十九年四月內、又附漳州客人王環山船至漳州海澄縣、起旱于本年五月內回家。

(1)に見られる「方白古登」(中国語は Fang Bai Gu Deng) という名前、恐らく「関白殿」の音訳「ハンバクドノ」であろうと思われる。蘇八は一五八〇年(万曆八)倭寇に捕まって日本に連行された明朝の漁民である。彼は日本に連行された後、日本で十年あまり暮らし、日本の事情をいろいろ見聞した。万曆朝鮮役の直前に秀吉が中国を侵犯しようとした計画を耳にした彼は、家族があるため、漳州商人の貨船に便乗して帰国した。帰国後、蘇八は直ちに台州參將の衙門に赴き日本の情報を報告した。日本の政局の推移を自分の目で見た蘇八が日本に関していくつかの詳細な情報を提供した。その中で、蘇八による秀吉情報は次のようである。

本國倭奴關白即名方白古登、向在銀山大頭目世子四也屯部下充小頭目。四也屯因見方白古登驍勇、屢差帶領倭奴征勦各島、有功、遂委方白古登掌管錢帛糧米軍器。方白古登威權日重、乘見四也屯年老無用、方白古登糾集衆頭目一十八人將四也屯殺死、衆頭目推

遜方白古登為六十六州總頭目、亦就占住四也屯銀山地方。：方白古登因見薩摩州島主不服、隨調飛蘭島主帶領倭奴一千征勦薩摩州、飛蘭島主依允統領衆倭并帶八隨征、到于金栢州海島。

蘇八の供述による関白「方白古登」の来歴は、秀吉の史実と余り辻褄が合わない。しかし、蘇八の耳に入った、旧主「四也屯」を殺し、六十六州の「総頭目」となった話は秀吉以外にははずである。そして、蘇八は秀吉の薩摩討伐および降伏という歴史事件を自ら経験している。そういった事実から見ると、「方白古登」は秀吉であるということは疑いがなからう。それに、蘇八は自分の目で「方白古登」の顔まで見ていた。当時の光景について蘇八は次のように述べている。

八住飛蘭島、親見方白古登于萬曆十八年二月內。：八觀見方白古登左頰上有黑痣數點、麵似犬形、約年六十餘歲。

蘇八は秀吉の顔をこの目で見た数少ない明朝人であり、彼の提供した情報が信頼できるものと思われる。また、蘇八は漁民の身分で、漢字も分からず、日本に渡った後何度も転売され、「打柴」、「種田」、「賣布」、「賣魚」と日本では庶民の暮らしを長い間いろいろ経験し、完全に日本社会に融け込んでいたといえる。日本社会の一員になった蘇八が齎した秀吉像は、日本の普通の民衆の間に広まっていた秀吉のイメージとも言えるであろう。

(4) 朱均旺の情報

蘇八が帰国した翌年(一五九二)に明朝に帰国した被擄人朱均旺が自分の知っていた日本情報を福建官吏に提供したばかりではなく、倭寇に拉致され日本に居住していた許儀後・郭国安が連署した報告書も明朝に将来した。

朱均旺本人が秀吉について次のように述べた。

關白初時決要内犯、因舊年七月喪子、並無弟兄、又将豊後州官妻奪來做妾、結成讐、又嚴刑暴虐、百姓亦怨、恐發兵之後、別有變故、及山陰道・南海道・西海道俱不肯附、以此中止。今要先往高麗對馬塚收服之後、再議内犯。⁽¹⁵⁾

ここには、以前の情報に見られなかった秀吉が「豊後州官」の妻を奪って自分の妾とし、「嚴刑暴虐」をもって百姓の怨みを買っているという悪いイメージが初めて浮上した。仁徳を強調する明朝人にとって極めて悪い印象を与えたであろう。

(5) 許儀後・郭国安の情報

朱均旺に託して明朝に齎された許儀後・郭国安が連署した報告書に、関白についての情報が以前より詳しく記されている。

日本關白、即漢大將軍號也、挾天子凌諸侯、擅據京洛。今之關白、乃民家之僕、以採薪之役遇正關白于道、左右欲殺之、關白釋而用之、以為前部、多乎出征隣國、遂斬首獲功、關白悅之、賜姓木下、賜名十吉次郎、每以謠俛事關白、累出累捷、關白以為大將軍兼相事、更賜姓羽柴、名執前。次年遂殺其關白、逐其子而自立、僭號關白、即初之十吉次郎、而今之關白也。東征西伐、併日本諸國、然未有戰一陣勝一陣、惟皆甜言大話、黃金詭計得之也。

去年十一月死其弟、今年七月死其子、内外無親、一人而已。⁽¹⁶⁾

ここに記されている情報は、もっとも詳しい関白の履歷書といえるであろう。「民家之僕」は陳申が提供した「奴隸」と同じ表現であるが、内容は前よりずいぶん豊富になった。「殺其關白、逐其子而自立」の内容も、陳申と蘇八の情報とある程度で一致している。それに、秀

吉と「正關白」との出会い、二度ほどの姓名の変更、および彼の日本を統一した戦略など、何れも興味深い情報となっている。

以上の「全浙兵制」に記録された情報は、すべて日本あるいは琉球から出発した南方ルート、すなわち琉球→福建、日本→浙江および日本→福建の路線によって明朝に伝わった情報である。実は、万曆朝鮮役の直前に、もう一つの情報伝達のルートが存在していた。それはすなわち朝鮮から明朝への北方ルートである。その情報は今となっては資料の欠如で、内容の全貌がわからないが、「明神宗實録」の記録によってその情報の一部が窺える。

朝鮮國王李昫具報、本年五月内、有倭人僧俗相雜、稱関白平秀吉併吞六十餘州、琉球南蠻皆服、明年三月間要來侵犯、必許和解。⁽¹⁷⁾

ここに見える情報は内容から見ればそれほど重要なものではない。しかし、関白「平秀吉」の呼称が中国の史料に登場するのは初めてで、そういう意味では、その情報の価値も高いといえるであろう。⁽¹⁸⁾

以上、万曆朝鮮役直前に明朝に伝わった秀吉情報は、事実と齟齬するところも幾つか挙げられるが、重要な軍事情報としての価値は否定できない。

(二) 明朝諜報工作による秀吉像

万曆朝鮮役の直前に明朝に伝わった秀吉情報は、明朝人の秀吉認識に大きな影響を与えた。その後、万曆朝鮮役がおり、秀吉に関する情報がまた他のルートによって明朝に入った。⁽¹⁹⁾特に、明政府が日本情報収集のスパイを派遣したことは注目しなければならない事実であ

る。その情報は当時の福建巡撫であつた許孚遠の「請計処倭酋疏」から詳しく窺える。

一五九三年（万曆二十一年）、明朝と日本が停戦して講和する最中、当時の福建巡撫許孚遠が史世用・許豫をはじめとするスパイを日本に派遣した。翌年の三月、派遣されたスパイの許豫および張一学そして張一治らが予想通りに最新の日本情報を明朝に齎した。その情報の中で、秀吉に関する情報の殆んどがマイナスイメージのものであり、明朝の秀吉を日本国王として冊封し明朝に朝貢させるといふ「冊封」政策に反対する許孚遠にいい口実を与え、万曆帝への「封貢」反対の説得に極めて役立つた。

秀吉についての情報は、薩摩に派遣された許豫が次のように報告した。

關白姓平名秀吉、今稱大閣王、年五十七歳、子纒二歳、養子三十三歳。關白平日奸雄詭詐、六十六州皆以和議奪之。一、前歲侵入高麗、被本朝官兵殺死不計其數、病死與病回而死者亦不計其數、彼時弓盡箭窮、人損糧絕、思逃無地、詭計講和、方得脫歸。一、關白令各處新造船隻千餘、大船長九丈、闊三丈、用櫓七十枝、中船長七丈、闊二丈五尺、用櫓六十枝、豫訪諸倭、皆云、候游擊將軍和婚不成、欲亂人大明等處。一、關白奸奪六十六州、所奪之州、必拘留子弟為質、令酋長出師以侵高麗、實乃實之死地、各國暫屈、讎恨不忘、及察倭僧玄龍與豫對答語氣、義久等甚有惡成樂敗之意、豫於寫答問亦微有罔誘之機。

秀吉の居城と遠く離れているためか、薩摩で活動した許豫が齎した秀吉の情報は極めて簡単なものであるが、「大閣」への呼称の変化お

よび「五十七歳」の年齢など、ある程度は精確な情報といえる。しかし、他の情報には、秀吉本人に関するものがあまり見られない。

一方、許豫と同じくスパイである張一学と張一治がわざわざ秀吉の居城の大坂城へ行つて調査を行った。彼らが秀吉に関する詳しい情報を大量に持ち帰つた。

秀吉の来歴について、張一学と張一治の報告に、

平秀吉始以販魚醉臥樹下、有山城州倭酋名信長居關白職位、出山畋獵、遇吉衝突、欲殺之、吉能舌辯應答、信長收令養馬、名曰木下人。又吉善登高樹、呼曰猴精。信長漸賜與田地、改名森吉、於是助信長計奪二十餘州。信長恐吉造反、加獎田地、鎮守大壩。有倭名呵奇支者、得罪信長、刺殺信長、吉統兵乘勢捲殺參謀、遂占關白職位。信長第三子御分見在吉部下。

とあり、許儀後が提供した秀吉の履歴と数箇所の齟齬が生じ、許儀後らの提供した秀吉の関白弑逆説を修正した。

さらに、張一学と張一治は秀吉の支配下にあつた日本の現状を調査し、次のように報告した。

一、征高麗興兵、吉有三帥、名石田・淺野・大谷、大小謀議、俱是三帥。

一、吉發兵、令各州自備糧船乾米、船運絡繹接應、家家哀慮、處處含冤。

一、豐護州酋首野柯踏統兵在朝鮮、聞大明助兵、喪膽逃回。吉探知、剿殺一家、立換總督。

一、兵入朝鮮在內浦港抽選七十人近回者止二十人日向國有大船裝倭三百近回者止五十人損失甚多

一、薩摩州乃各處船隻慣泊之處今從此發有往呂宋船三隻交趾船三隻東埔船一隻暹羅船一隻佛郎機船二隻輿販出沒此為咽喉也

(中略)

一、城池附在山城州、蓋築肆座、名聚樂映淀、俱在大界等處。每城用圍三四里、大石高聳三四重、池河深闊二十餘丈。內蓋大廈樓閣有九層高危、瓦板妝黃金、下隔睡房百餘間、將民間美麗女子、拘留淫戀、又嘗東西游臥、令人不知、以防陰害。

一、日本有罪、不論輕重、登時殺戮。壬辰年、吉有一孩兒病故、妄殺乳母十餘人。癸巳十一月、吉在名護屋、回聞家中女婢通奸、

將男女四人生燒於大堺野中、究殺知情婢僕七十餘口。凡盜竊、不論贓證多寡、登時殺之、以是六十六州水陸平寧、任其通行貿易。

一、吉自丙戌年擅政、倭國山城君懦弱無為。壬辰征高麗、將天正三十年改為文祿元年、吉自號為大閩王、將關白職位付與義男孫七郎。七郎字見吉、年幾三十、智勇不聞。

(中略)

一、虜掠朝鮮人民、多良家子女、糠餼草宿、萬般苦楚。有秀才名廉思謹等二十餘人、被虜在日本、吉令厚給衣食、欲拜為征大明軍師、謹等萬死不願。

これらの情報は、国民を圧搾し、將校と百姓を虐殺し、高圧的な政策をもって日本を統治するマイナスイメージの秀吉像を明朝人に与え、てしまったのである。

以上の情報を踏まえて、許孚遠の脳裏に秀吉のイメージが形成された。彼は次のように秀吉のことを評した。

臣等竊料平秀吉一狡詐殘暴之夫耳、本以人奴篡竊至此、彼國諸酋

欲為秀吉之為而思攘奪之者甚衆。陰謀伐國、構怨亦深、如結薩摩州將幸侃、逼令州官義久殺其弟中書以自明、義久不得已而佯為降順、其心未嘗一日忘秀吉也。奪豐後州官之妻為妾、民間妻女充塞臥内、淫虐百端、諸州質子、禁若囹圄、父子兄弟不能相見、共不勝其仇讎忿恨之情。日本原無征科之擾、而今令各州遠道輸糧、原無輿大兵動大衆之舉、而今則徵發騷然、舉國鼎沸、倭之人民、何以堪命、日事殺人、而虞其噬、多行不軌、而慮其毒、故出則蒙面、臥則移徙、彼亦自知其不免于禍。以事理策之、秀吉之自底滅亡、可計日而待也。

許孚遠はある程度秀吉の才能を認めていたが、秀吉を「一狡詐殘暴之夫」と評していることには変りがない。特に篡奪によって日本政權を手に入れたこと、および残酷な性格、淫乱な本性は、道学家としての許孚遠に強く非難された。許孚遠は、秀吉は既に薩摩と豊後の恨みを買ったばかりではなく、「征科之擾」によって全国の叛乱を招く憂いもあると見定めている。情報によって秀吉の本性およびその支配下の日本の現状を見抜いた許孚遠は、明朝の秀吉への「封賞」政策に激しく反対した。彼は「倭酋倡亂、惟在平秀吉一人」と断言し、秀吉が「自底滅亡、可計日而待」と確信して、さらに「莫妙於用間、莫急於備禦、莫重於征剿」とくに「會師上游、直搗倭國」という直接の日本征伐案を強く万曆帝に提案した。

上述のように、一五九三年（万曆二十一）から翌年までの諜報活動によってより詳しいかつ正しい秀吉情報が明朝に齎された。それらの新しい情報は、古い情報を修正する役目を果たした上で、明朝の国策までも影響を与えた。

表一 明代万曆時期的著書に描かれた秀吉像

出典	豊臣秀吉に関する内容	版本状況
①張瀚『張恭懿松窗夢語』卷三「東倭紀」	嘉・隆以來、諸洲島嶼各相雄長、山城君號令久不行于諸侯。近傳華人関白秀吉者入其國、尚倭王寡宮主、陰竊其位、號令洲島、併國數十、今已下朝鮮、陸兩京、掃八道、走其國王、逃竄於我遼陽邊境。遣統帥石田・淺野・大谷・孫七郎等據之。平壤以北、皆高壘堅壁、以抗王師。此其狼心尚未艾也。	万曆二十一年(一五九三)序の清鈔本(註①)
②謝杰『度臺倭纂』下卷「今倭紀」	關白者、倭官號、猶中國之稱大將軍、即今所封日本王平秀吉也。原姓木下、名十吉次郎、一名木下森吉、蓋夷種。…以余所聞、秀吉、其初微乎微者、能登高樹、號假精、曾以樵遇國王于途、醉不及避左右、欲兵之、秀吉以口辨得免、收入王部下、試以諸事、輒了。問之能兵、曰能、捕海上諸小寇、又輒效。王悅、妻以女、俾典兵事。秀吉桀黠、既握兵柄、漸以威懾其下、下人畏之、知有秀吉、不知有王。王即豐後君、縋出雲而立者、名信長。先是山口軍門坂山城君而自立、雄據西偏、併石見・長門・安藝・備前・備後・備中・出雲・伯岐・丹後・因幡・但馬等十二州、稱山口君、出雲奪歸其地、稱出雲君、出雲為陶殿所殺、豐後又殺殿而嗣立、稱豐後君、皆非真日本王、日本真王在山城、然號令不行已久、微弱已甚。豐後君雄于嘉靖丁巳間、不二三年而秀吉用事。其雄也、其佐助之力、其亡也、其篡奪之謀。秀吉擊陶殿之敗、為逆不終、不欲身被此名、會王父子不相能、乃陰讒於王曰、王長子將不利於王。王惑之。復陰洩於王長子曰、王多內寵、愛有所溺、豐後恐非王子有。王長子憤且懼、而王不知也。隨有鐘巫之及、吉弼號於衆曰、王子得罪于天、國之大賊、不可不討、因自稱關白、捕王長子、戮之、併殺其參謀阿奇支。豐後舊臣相與議曰、是非能討賊、不過擄我骨肉、使交相戕、不去、禍將移於幼君、因扶其少子出亡、岳險以拒秀吉、迄今西海道不臣於彼、以故君之子在耳。秀吉既得豐後、雄心未已、狹詐愚六十六州與議和、並質其愛子、徵其精兵、六十六州之長、不敢不從、威震海外、…	万曆二十三年(一五九五)自刻本(註②)
③慎懋賞『四夷廣記』(中)「東夷・日本國」	至萬曆十四年、山城王秦孺弱無能、有倭人平秀吉者、以販魚醉臥樹下、山城州関白信長出山徵、遇吉冲突、欲殺之、吉能舌辯、信長收令養馬、名曰木下人。吉又善登高樹、呼曰假精。信長漸與田地、改名曰森吉、助信長奪二十餘州、弑秦王而自立。信長恐吉有叛意、多給田產、令之鎮守大界。有參謀阿奇支者、得罪信長、吉統兵殺參謀。信長授吉以関白。后有明智者、弑信長、秀吉率行長諸將殺明智、自立於大界。	旧鈔本、記事は万曆二十三年(一五九五)の明朝の封倭決定まで(註③)
④王圻『續文獻通考』卷二百三十四「四裔考・日本」	平秀吉自丙戌年擢改倭國山城、壬辰入寇高麗、將天壬二十九年改為文祿元年、吉自為大開王、以関白與養子孫七郎、秀吉自稱大開、猶言國王也、每年元旦率大臣一謁天王、他時並不相接。…秀吉乃平氏家奴、初以販魚醉臥樹下、適舊関白信長出獵、欲殺之、復以吉舌辯留之養馬、改名森吉、助信長計奪二十餘州、信長加獎田地。鎮守大將有參謀阿奇支者、得罪信長、吉統兵掩殺之、乘勝遂占関白。	万曆三十年(一六〇二)松江府刻本(註④)
⑤諸葛元聲『兩朝平攘録』卷四「日本上」	時國王姓秦、而平信長為関白。信長雄鷲能御下、而秀吉為之義子。秀吉幼微賤、不知父所出、其母為人婢、得娠、生欲棄之、有異徵不果棄。及長、勇力矯捷、不事生業。初以販魚醉臥樹下、信長出獵、吉驚起衝突、欲殺之、復以吉舌辯留之養馬、名木下人。秀吉善上高樹、人呼為假精。信長每携之出兵、無不勝者、因大寵愛、賜之田土、改名森吉。凡助信長計奪二十餘州。信長恃功大勢盛、遂弑國王自篡立。秀吉以信長篡成、賞已輕、多怨望、信長知之、恐其叛已、因加獎田地、令為攝津鎮守大將。有參謀阿奇支者、得罪信長、命吉統兵掩殺之。已而信長又為部將明智所弑。秀吉方攻阿奇支、聞變遂與部將行長等乘勝舉義兵誅明智、此萬曆十四年事也。信長雖死、有三子、皆長成、秀吉皆廢之、而自立。…秀吉既篡位、乃以関白與其養子孫七郎、而以弟美濃為大將、於是益治兵衆征服諸州、至萬曆十七年兼并六十六州、皆為臣僕矣。…秀吉多智略、剛果有斷、能為以恩威、又善用人、故能混一諸島。惟性嗜賭殺…	萬曆三十四年(一六〇六)刻本(註⑤)
⑥郭正域『合併黃離』卷二十一「禦倭」	日本僻在東南、彼平秀吉一亡虜耳、故販魚窮餓、彼所謂山城州明信長者、故関白也、憐其黠慧、牧為養卒、與之計奪諸州、鎮守大界。後呵奇支刺殺信長、吉執仇殺奇支、襲其名號、蠶食六十六州。	万曆四十年(一六一二)刻本(註⑥)
⑦張燮『東西洋考』卷六「外紀考・日本」	萬曆十四年、平信長為関白、其養子平秀吉者、先是母為人婢、得娠欲勿舉、念有異徵、育之。秀吉幼微賤、販魚為業、醉臥樹下、信長出獵、吉驚起衝突、將殺之、見其鋒穎異常、因留養馬、名木下人、嗣從征伐、有功、為大將、已而信長為明智所殺、秀吉與行長誅明智、廢信長子、自立為関白。	万曆四十六年(一六一八)刻本(註⑦)

(註①)『續修四庫全書』(上海古籍出版社、一九九五年)第一一七一冊、四四四下頁。
 (註②)『北京圖書館古籍珍本叢刊』(書目文獻出版社、一九九〇年)第一〇冊、三七二下頁。
 (註③)『玄覽堂叢書續集』(台北)國立中央圖書館、一九八五年)第二〇冊、二二二―二二〇、二二一頁。
 (註④)『續文獻通考』(台北)文海出版社、一九七九年、一三九〇九―一三三

(註⑤)『四庫全書存目叢書』(台南)莊嚴文化事業、一九九七年)史部第五四冊、七四八上、七四九上頁。
 (註⑥)『四庫禁燬書叢刊』(北京出版社、二〇〇〇年)集部第一四冊、一七八上頁。
 (註⑦)『東西洋考』(台北)正中書局、一九六二年、一三四―一三五頁。

以上の情報をもとに、福建巡撫許孚遠を代表とする明朝人はより鮮明な悪いイメージの秀吉認識を持つようになり、その結果、秀吉に対する手厳しい国策建言を導き出すことになった。ここに見える秀吉に関する情報および情報によって明朝人に与えた秀吉の悪いイメージは、明朝に恐ろしいほどの反応を招致したといえるであろう。

(三) 万曆時期の文献から見た秀吉像

万曆朝鮮役の後、日本と交戦状態になった明朝は、日本に対する関心が強くなってきた。戦争を契機に、多数の日本に関する著書が上梓された。それらの文献に、朝鮮侵略の首悪とされた秀吉の姿が特筆されていたことが多いのである。表一は万曆時期に編纂された一部の日本に関する文献に記されている秀吉のイメージを示したものである。

表一に掲げた七種の書籍は、謝杰の「虔臺倭纂」の以外、何れも日本事情を述べているが、日本を詳しく研究した書物ではない。それらの文献はすべて日本関係の巻、或いは項目を設け、以前に明朝に齎された日本情報などを参考しつつ、さまざまな秀吉像を描写している。

それらの秀吉像は、勿論、前述した明朝に伝わった秀吉情報を参考にしたところが多い。例えば、秀吉の来歴について、③④⑦までの著書のすべてが秀吉の「販魚」の経歴を記し、許孚遠「請計処倭酋疏」に現わした、張一学と張一治が日本から齎した情報を手本にしたことが窺える。

しかし、以上の著書と万曆時期の秀吉情報の間に必ずしも合致するとは限らない。①張瀚「張恭懿松窗夢語」にある関白の「華人説」は、当時明朝に伝わった秀吉の中国人説を反映したもので、当時の日

本情報には見られないのである。②謝杰「虔臺倭纂」の秀吉にかかわる「樵遇國王于途」との一説は、未だ許儀後の報告書にある「以採薪之役遇正關白于道」の言い換えと言える。しかし、その後の話は、報告書の秀吉情報と大きく異なっている。特に信長と秀吉との複雑な人間関係に関する記述、および山城↓山口君↓出雲君↓陶殿↓豊後君(織田信長)↓平秀吉という政権の移り変わりは、上述の秀吉情報とは全然関係がないものと思われる。それらの記述は、恐らく当時に流行していた誤伝によって作られた話で、間違った秀吉像である。

三、「斬蛟記」から見た秀吉像

万曆時期における秀吉像は、地方官吏の報告書、朝廷大臣の上奏文および当時の時事に関する文献によって明朝に流布し、人々に認識されるようになった。

しかし、それらの明朝人に認識された秀吉像は、必ずしも正しいとは限らない。伝聞の真偽によって、明朝人の眼中にある秀吉は正しい情報との間にはずれが生じ、誤伝による変容した秀吉像も作られるようになった。秀吉の中国人説はその一つである。秀吉の中国人説は万曆朝鮮役が起った後、速やかに明朝国内に伝わって、更に朝鮮にまで流布し、明朝と朝鮮に大きな影響を与えたのである。⁽²⁾

また、秀吉が中国から日本に逃げた水中の妖怪「蛟」であるという噂も作られるようになった。それをはじめとする「蛟秀吉」を斬殺した物語が早速当時の小説に現われるようになった。当時朝鮮に派遣された明朝軍の参謀を務めた文人袁黄が著者とされる短編小説「斬蛟

「記」はその秀吉の虚像を表したものである。⁽²⁵⁾

本節では、「斬蛟記」に見られる秀吉像について、若干の考察を行いたい。

(一) 著者と版本

「斬蛟記」の著者に関しては、内容から判断すれば、袁黄が自ら著わした小説であると思われる。⁽²⁶⁾しかし、自らの文集に「斬蛟記」を収録した同じ時代の文人陳繼儒は次のような註釈語を記している。

右斬蛟記、或云是了凡作、或云他作以竇袁者、姑記之以資嗚噓。⁽²⁷⁾

すなわち「斬蛟記」は、了凡の作とし、或いは了凡を嘲る意味で名を了凡に託した他人の作とすると記されているが、いずれにせよその小説が面白いから収録したわけであり、陳繼儒は結局その著者名を明記していない。

陳繼儒のいう「了凡」は、袁黄のことを指している。袁黄、字は坤儀、号は了凡、浙江嘉善県の出身で、一五八六年（万曆十四）、進士に合格し北京の通州に属した宝坻県の知県となった。その後、兵部主事に昇進した。一五九二年（万曆二十）、時の朝鮮經略の宋應昌の推薦により参画に任命され朝鮮役に参戦した。翌年、諫官の弾劾によって退官を強いられた。

陳繼儒は袁黄を「斬蛟記」の著者とはつきり認定しなかった理由は、孟森氏の考証によると、恐らく陳繼儒が「斬蛟記」を利用して袁黄を嘲る張本人であったからであろう。孟森氏「袁了凡斬蛟記考」に、

右記文、據眉公言、似是明萬曆末流行之小説、但其託之於了凡自

撰、即眉公亦不敢質言、以今考之、此即眉公所以嘲了凡者也。了凡頭巾氣極重、應爲眉公輩所哂笑。

(中略)

眉公爲太倉王相國錫爵館賓、王相子衡、與眉公相得。…眉公與衡同聲氣。今按衡有「與袁了凡主政書」、意頗不滿于袁、此亦見「斬蛟記」之必出於眉公輩輕薄之筆矣。⁽²⁸⁾

とある。王衡は頗る袁黄に不満を抱いており、その親友である眉公（陳繼儒）も必ず袁黄に不満をもっていると断言し、最後に「斬蛟記」は必ず眉公たちの軽薄の筆によったと大胆に断定した。その大胆さは、いささか軽率に失したと思われる。

実は、「斬蛟記」に関して、袁黄と同郷で同時代の沈德符の「萬曆野獲編」には次のような記述がある。

關白之犯朝鮮、朝議傾國救之。時宋桐岡（應昌）以少司馬督師專征。宋無闕望、能大言。次年、將內計有物色之者、因力任東事。

大司馬石東泉主之、內閣則趙蘆溪暫代首揆、唯石是聽、特遣二主事贊畫、皆妙選才望、賜四品服以往、宋亦加服一品、得倖副帥以下、事權特重。後碧蹄館敗歸、師遂不振。次年癸巳、一贊畫者以拾遺論罷。其人故耆夙名士、爲太倉相公門人、號相知、意其能援手。時競傳關白已死、遂作一書、名「斬蛟記」。首云、關白平秀吉者、非人亦非妖、蓋蛟也、漏刃於旌陽、化成此酋、素嗜鵝、在朝鮮時、曾謀放萬鵝於海中、關白恣啖、因得剗刃、而主之者、曇陽大師也。記出、遠近駭怪、其同邑先達、遂作「關蛟記」詆之以快宿隙、究之關白、實未死、此君亦未得出山、而太倉相公會見此記與否、皆未可知也。⁽²⁹⁾

沈徳符はここで袁黄の「斬蛟記」の創作経緯をも披露した。拾遺(諫官)の弾劾によって官位を失った袁黄は無念を抱き、王錫爵からの援助の手を望んでいたのである。ちようどその時、関白が死んだという噂が急に明朝に伝えられてきて、人々に痛快な話題を与えた。袁黄はそれらの時事を踏まえて自ら創作を凝らし、「斬蛟記」の話が出来たのである。さらに、王錫爵の娘である曇陽大師が主人公として「斬蛟記」に書き込まれ英雄視された。それは、ある意味では王錫爵の娘にお世辞を言つて、これによって王錫爵の援助を求めようとしたのかもしれない。しかし、「斬蛟記」が出ると、多くの人々を驚き怪しませ、結局同郷の先達は「鬪蛟記」を作つて彼を攻撃することとなった。その結果、袁黄は二度と出仕できなかつた。王錫爵もこの「斬蛟記」を読んだかどうかは不明である。

沈徳符は「斬蛟記」に対しては高い評価を与えなかつたが、袁黄を「斬蛟記」の著者としてはつきり認めたのである。沈徳符は浙江秀水の出身で、袁黄とは時代も近く、同郷でもあり、彼の記述はもつとも信頼できると思われる。しかし、沈徳符に引用された「斬蛟記」は、現在に見える「斬蛟記」の内容とはあまり合致していない。齟齬が生じた箇所は二つある。一つは、引用された小説のはじめに「非人亦非妖、蓋蛟也」の内容があり、現在の「斬蛟記」に見られる蛟が中国から逃げたという説とは異なっている。二つ目は、曇陽大師の姿も現在の「斬蛟記」には見えない。それは、恐らく当時秀吉に関する小説「斬蛟記」には幾つかの版本が存在しているためであろう。すなわち、曇陽大師を「斬蛟記」に入れて英雄視して王錫爵の援助を望んだ袁黄の初作があるとともに、その後袁黄に名を託し袁黄の初作を書

き直した後の作品もあると思われる。その改作された「斬蛟記」こそ、孟森氏が断言した、陳繼儒たちが作つて袁黄を嘲る作である可能性が高いと思われる。

「斬蛟記」の版本は、著者とされた袁黄が著わした「袁了凡文集」には収録されていない。陳繼儒の「眉公秘笈」にその全文が収録されたが、版本の流布が希少で、あまり世には見えない。一九一七年(民国六)、孟森氏の「袁了凡斬蛟記考」(上海商務印書館)が刊行され、「斬蛟記」の全文を収録し、「斬蛟記」は初めて世に知られるようになった。次は孟森氏が蒐集した「斬蛟記」を使つて分析したい。

(二)「斬蛟記」に見る秀吉像

現行の孟森氏の収録本「斬蛟記」に見る秀吉像は、人間の姿ではなく、千二百年前中国から日本に逃げた蛟龍の化身である。「斬蛟記」のはじめには、もともと中国の「異類妖孽」であつた秀吉について次のような経緯が述べられている。

關白平秀吉者、非日本人、非中國人、蓋異類妖孽也。昔旌陽許真君斬蛟時、有小蛟從腹而出、以未有罪不加誅、縱入江、歸大海、至日本之紅鹿江銀蛟山居焉。歴一千二百餘年、所害物類、不可勝紀、今又化爲人、即平秀吉也。⁽²⁾

「紅鹿江」は考証できない地名であるが、「銀蛟山」は恐らく前述の蘇八の供述に現われる「方白古登」の根拠地であつた「銀山」であろう。ここに見られる秀吉の話は、中国の蛟精退治伝説に付会され、昔から伝わつた許真君の斬蛟の物語にまで遡ることができ⁽³⁾る。

日本に渡つて人間の姿に化けた秀吉は、普通の人間よりずる賢かつ

た。彼は自らの才能を發揮し、ついに日本の関白を殺し、その地位を篡奪し、更に自己の知力をいかして日本の六十六州を統一する偉業を成し遂げたのである。

奸謀狡計、遠出常人之上。日舊有王、居山城、號令不行於各島者百餘年、各島爭鬪無已時。今王即位、僅二十一年、吉從徒中崛起、殺舊關白、奪其位、以智力收服六十六洲⁽²⁴⁾。

「斬蛟記」に、秀吉の麾下に、妖怪を中心とする集団が存在していたことも語られている。

各洲之民、不虞其爲異類、但見其詭譎莫測、畏而服之。其部下諸將三十六員、有王卿者、今爲僧、最親愛、而總兵權、亦蛟屬焉⁽²⁵⁾。

ここに名前が見える王卿は、秀吉の麾下の將校の中には名前が現れていないのである。その名前から見れば、恐らく倭寇王直と宋素卿の名前を組み合わせたものであり、嘉靖時期の倭寇の姿が反映されていると思われる。

その後の秀吉は、自分の威勢を拡大し琉球・朝鮮までも服従・朝貢させた。しかし、蛟である秀吉の野心は、人間とは思えないほど大きかった。彼はついには朝鮮を犯し、さらに明朝をも征服しようとしたのである。

(万曆)二十年四月、日人二十餘萬犯境、由對馬島至釜山鎖登岸、朝鮮居民、望風逃遁、倭將平秀嘉據王京、行長據平壤、清正據安邊、沿途屯聚、絡繹相通、其意實欲從中犯遼、憑陵上國⁽²⁶⁾。

その朝鮮を侵略した事件をきっかけとし、明朝の道士たちに妖怪の本性を見抜かれた秀吉は自分の最期を迎える。

その時、朝鮮では明軍は日本軍との戦いを準備していた。一方、袁

黄の「仙師」をはじめとする道士たちは日本へ渡って蛟の妖怪である秀吉を斬殺しようという「斬蛟」計画も密かにされていた。実施した計画は次の通りである。

仙師復遣程師兄洞真來訪、索銀欲買鵝三千六百隻、且言許師兄在東阿相候、許名道源、即旌陽裔孫、先從師而得道者也、予盡出囊金二百餘兩與之、程師兄攜往東阿、買鵝一千二百隻、復同至東平、主於吳二家、買鵝不多、即至東昌、共買一千八百隻、又至萊山、買鵝七百隻、駝至海濱、祖師遣張師兄英接浮海而東、祖師同黃石公徐茂公丘長春及許張二師兄、上鳳凰山周視、羣仙相與酌議、謂勝倭不難、但既破倭兵、關白必親帥師而來、我兵不能當、彼即浮鴨綠、據遼東、入山海、薄京城、覆而後圖、難矣、於是相與浮海至銀蛟山⁽²⁷⁾。

日本の銀蛟山に至った道士たちは鷲鳥の群れを放ち、道符を書いて道法をおこし、蛟を誘い出した。その際に現れた蛟の姿の秀吉は恐ろしい化物であった。

有一物在圍中舉首、其狀巨如洪鐘、有赤髮披面、其面甚醜、兩目黃色瑩瑩然、若明若滅⁽²⁸⁾。

その後の斬蛟の過程はそれほど複雑ではなかった。祖師が剣を振るって一撃すると、「蛟秀吉」の頭はすぐに落ち、死体は水面に浮かんで来た。なお、斬殺された蛟の様子は次のようである。

約長數十百丈、蛇形而魚鱗、穢氣充塞、其白如霧、咫尺不辨人色。頃之開霽⁽²⁹⁾。

その日は、一五九三年(万曆二十一)正月七日、ちょうど明軍が平壤城を攻撃する前夜である。当日の三更(午前三時から五時まで)こ

ろ、義州に滞在していた著者袁黄は頭を擡げて天象を観察し、妖星が東方に墮ちたのを見て、閔白の死を覚ったという⁽⁴⁰⁾。まさに小説には神秘の色が満ち溢れているのである。

(三) 「斬蛟記」の創作背景と秀吉像の変容

「斬蛟記」に見える秀吉像は、これまで述べてきた秀吉像と大きく異なっている。この蛟の姿としての秀吉像は、既に見てきたような人物像として扱うことができない。小説に出てきた虚像といえる秀吉像は、荒唐無稽な作り話ではない。その虚像は実に当時の明朝人が認識した秀吉の実像を反映しているのである。次に「斬蛟記」の秀吉像の変形の要素としての三つの創作背景を挙げてみたい。

(一) 秀吉の中国人説

「斬蛟記」は当時明朝に流布していた秀吉情報の変形と大きな関係があると思われる。「斬蛟記」が成立する以前に、秀吉の中国人説は既にひろまっていた⁽⁴¹⁾。「斬蛟記」のはじめに「關白平秀吉者、非日本人、非中國人、蓋異類妖孽也。昔旌陽許真君斬蛟時、有小蛟從腹而出、以未有罪不加誅、縱入江、蹄大海、至日本之紅鹿江銀蛟山居焉」という記述が、当時明朝に流布していた秀吉の中国人説に基づいた言い替えといえるであろう。

中国史上、海外で帝王の業をなした中国人に関する物語は、実に先例が多い。宋代の類書「太平広記」に初めて見られる「虬髯客」は、恐らくもつとも早く海外で活躍し帝王の業を遂げた中国人の話であろう⁽⁴²⁾。明代末期に作られた「水滸後傳」には、梁山好汉李俊がシャム国に渡って国王に推挙されたという興味深い物語もある⁽⁴³⁾。

しかし、当時の明朝で流行っていた話の中では、明朝人と認定された秀吉が、母国を狙って朝鮮を侵略したのである。このマイナスイメージの秀吉は、ある意味では明朝人の墮落者として国家の恥ともいえるであろう。したがって、秀吉を貶して否定する中国出身の妖怪説が作られるようになったと思われる。

(2) 蛟精退治の民間伝説

中国の文学史上、多数の「斬蛟記」作品が存在している。袁黄の「斬蛟記」は、「斬蛟記」シリーズの一つでしかないのである。例えば、王陽明が寧王朱宸濠を掃討した時、明人董穀が「斬蛟」の篇を作った。それは王陽明が寧王を蛟龍の化身として斬殺した話である⁽⁴⁴⁾。王勇氏が既に指摘されたように、袁黄の「斬蛟記」も中国民間に広く流布している許真君の蛟精退治の伝説から題材を借りて朝鮮での戦いの時事問題を述べたものである⁽⁴⁵⁾。

(3) 秀吉の急死説

袁黄「斬蛟記」において、秀吉の急死という時事情報は重要な背景であると思われる。

実は、秀吉の偽の死亡情報は早くも一五九二年(万曆二十)に既に明朝側に伝わったのである。その年の十二月四日、当時の朝鮮略宋應昌が兵部尚書石星へあてた書簡には次のような情報が記載されている。

又據通事朴仁儉報稱、關白領兵屯對馬島、被深國人乘虛盡數殺死。又謂深國即薩摩州也。恐未的結報帖附覽相公處、乞為轉致。

餘未敢悉⁽⁴⁶⁾。

この情報は、一貫性に欠けているため、明朝に余り影響を与えな

った。しかし、半年後、明朝のスパイ沈丙懿が南方から持ち帰った情報、明朝に大きな影響を与えた。沈丙懿がもたらしたこの情報について、戸科給事中吳應明はその筋道を分析した上、信用できるものとして明政府に上奏した。その件に関しては「明神宗實録」に次のような記録がある。

戸科給事中吳應明題：近見兵部差沈丙懿密訪夷情、内稱關白中毒已斃□二賊相圖、經略總督了無報聞。臣觀倭奴攻陷朝鮮、易于破竹、乘勝之師、何所不逞、乃我師一集、輒棄開平而不顧、守王京而不堅、豈誠畏威遠遁哉。自古行師、不戰而退者、非軍中有疫、則國中有變、未可知也。(□・不明文字)

沈丙懿はもともと兵部の命令を受け日本の情報を探るために福建に派遣された軍官で、当時の福建巡撫であった許孚遠に「老而黠」と悪評され、兵部への復命を命じられた。ここから見れば、日本へ行かなかった沈丙懿が提供した情報は、ただ東南沿海地域に流伝していた誤報をまとめたものと推察できる。

しかし、沈丙懿が齎した情報は明朝に大きな反響を引き起こした。給事中吳應明の上奏によって朝廷に伝わったばかりではなく、民間にも伝播していった。孟森氏「袁了凡斬蛟記考」は明人張埏の「息影偶録」を引用し、当時の江南における秀吉の話のように述べている。

吳下稱奴爲鼻頭。嘉靖中、王氏僕吳一郎、富而驕、以貨得官、嘗乘四人轎赴姻家席、孝廉張伯起惡之、時有關白之警、伯起乃謂吳曰、近聞邸報、關白已就擒、吳欣然問之、伯起曰、關白原是一怪、身長數十丈、腰大百圍、截其頭亦數千斤、吳曰、那有此事。

伯起曰、只一個鼻頭、亦用四人擡之。吳知其誚已、不終席去。⁽⁴⁹⁾

ここから、当時、秀吉の急死説は、明政府の官報に相当する邸報によっていち早く江南地域にまで広まっていたことが読み取れる。さらに、その情報は文人張伯起によって滑稽な関白の妖怪説まで作られたように、横暴な成金者を嘲笑する素材となっていたことも窺える。

袁黄の耳に入った秀吉の死亡情報も、恐らく同じ沈丙懿が入手した秀吉情報である。しかし、彼の「斬蛟記」の創作において、尚宝司少卿潘士藻⁽⁵⁰⁾という人物からの影響は無視できない。

「斬蛟記」の記録によると、辞任してから北京へ戻っていた袁黄は、都に辿り着こうとした時、潘士藻の会見を受け、斬蛟の話聞いたのである。

晝夜兼行、將至都門、潘尚寶遣人約會、則斬蛟之事、予所願秘而不敢洩者。渠皆預道之、于我心有戚戚焉。⁽⁵¹⁾

潘士藻と「斬蛟記」の関係について、「萬曆野獲編」にも次のような記述がある。

斬蛟之記、亦有所本、潘璽卿雪松(士藻)、馮司成癸未所録士、滯符臺十年、在京借諸名士立講會、每云：「吳猛鎮鐵柱宮、實多遁去者。許眞君約後千年、當生八百散仙、誡此孽魔、今正其時矣。我為一人、與某某等皆同列、余師司城公亦其一也。」京師信之、競求附仙籍。⁽⁵²⁾

ここから見れば、袁黄が耳にした「斬蛟」の話は、恐らく潘士藻が作った蛟を封じる「吳猛鎮鐵柱宮」から始まった話の展開であろう。潘士藻が秀吉の急死情報に基づいて斬蛟の話を作り、袁黄に伝えた。袁黄は、潘士藻が口述した斬蛟の話から示唆を受け、自己をも斬蛟に

関係した人間として「斬蛟記」を創作したわけである。

四、おわりに

以上、明代万暦時期において形成された秀吉像について述べてきた。

万暦朝鮮役前夜に明朝に伝わった秀吉に関する情報は、一五九一年（万暦十九）の秀吉の「入寇大明」の情報とともに明朝に齎されたものである。南方ルートすなわち琉球→福建、日本→浙江、日本→福建の経路によって明朝に伝わった秀吉情報は、「全浙兵制」の記載から詳しく窺える。それらの情報は、明朝人にとって初期の秀吉情報として高い価値を持ち、当時明朝人の秀吉認識にも大きな影響を与えた。

その後、また多くの秀吉の情報が明朝に渡ってきた。それらの情報の中で、明朝の諜報工作によって将来した秀吉の情報に注目しなければならぬ。こうした最新の、正確かつ詳細な情報は、この前の古い情報を修正した上で、残虐、淫乱、窮地に追い込まれた秀吉像を明朝人に与えた。秀吉のマイナスイメージを受けた明朝の官吏は、和議に反対したばかりではなく、直接に日本本土を征伐する提案も万暦帝に提出した。マイナスイメージの秀吉像は明朝の手厳しい対応策を招致したのである。

上述の秀吉の情報から見た秀吉像のほかに、万暦時期に上梓された多数の日本に関する文献にも秀吉が登場している。それらの文献に載る秀吉像は、上述の情報を参考にした以外に、かつて明朝に流行していた誤伝をも採用し、誤った秀吉像を形成することとなったのである。

る。

しかし、万暦時期の短編小説「斬蛟記」は、以前とまったく異なる秀吉の虚像を描いている。この蛟の姿に化けた秀吉像は、荒唐無稽な作り話ではなく、当時明朝に流布していた秀吉の中国人説と秀吉の急死説を反映した秀吉認識であった。

明代万暦時期に発生した朝鮮役は、明朝と日本との両国に大きな影響を与えたのである。嘉靖末期に倭寇が退治された後、長い間あまり日本と接触しなかった明朝は、朝鮮役を契機に再び日本への関心を強めた。当然に日本情報は明朝に伝わったばかりではなく、明朝政府は日本情報の収集にも情熱を傾注している。それらの情報に基づいて明朝人の眼中に現われた様々な秀吉像は、明朝人の日本認識を高めたといえるのであろう。

注

- (1) 「朝鮮」宣祖昭敬大王實録」(「李朝實録」第廿七冊、学習院東洋文化研究所、一九六七年) 壬辰二十五年(二五九二) 四月、六月、三一、九一、三四五頁。
- (2) 明侯繼高「全浙兵制」(「四庫全書存目叢書」子部三二、「台北」狂齋文化事業、一九九七年) 第二卷附録「近報倭警」、一七五上頁。
- (3) 福建巡撫、万暦十九(二五九二)年八月「安民禁約」(「玄覽堂叢書續集」第四冊「倭志」、「台北」中正書局、一九五八年、二四一—六三—一三—六—四頁)による。
- (4) 万暦朝鮮役前後の明朝への日本情報について、松浦章「明代海商と秀吉「入寇大明」の情報」(末永先生米寿記念会編纂「末永先生米寿記念献呈論文集」坤、奈良明新社、一九八五年) 一七—一七—四三頁、三木聡「福建巡撫許孚遠の謀略——豊臣秀吉の「証明」をめぐる——」(高知大学人文学部「人文科学研究」四、一九九六年)、米

- 谷均「全浙兵制」「近報倭警」にみる日本情報」『8—17世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流—海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に—』（東京大学大学院人文社会科学系研究科、二〇〇四年）一二五—一四二頁等の論考があり、参照されたい。
- (5) 明侯繼高「全浙兵制」〔四庫全書存目叢書〕子部三一、「台北」莊嚴文化事業、一九九七年〕第二卷附録「近報倭警」、一七二下—一七三上頁。
- (6) 同上、一七三下—一七四上頁。
- (7) 同上、一七五上—一七六下頁。
- (8) 米谷均「全浙兵制」「近報倭警」にみる日本情報」『8—17世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流—海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に—』（東京大学大学院人文社会科学系研究科、二〇〇四年）一二五—一四二頁を参照。
- (9) 明侯繼高「全浙兵制」〔四庫全書存目叢書〕子部三一、「台北」莊嚴文化事業、一九九七年〕第二卷附録「近報倭警」、一七五下—一七六下頁。
- (10) 同上、一七六下頁。
- (11) 同上、一七五下頁。
- (12) 同上、一七七下—一七八上頁。
- (13) 同上、一八二下—一八三上頁。
- (14) 「明神宗實録」〔台北〕中央研究院歷史語言研究所、一九六六年〕卷二四二、万曆十九年（一五九二）十一月丙寅（四日）、四五〇八頁。
- (15) 「朝鮮」趙憲の「重峰集」〔影印標點韓國文集叢刊〕五四、「韓国」景仁文化社、一九九〇年〕巻八に当時の朝鮮の国王のために、「擬進奏慶皇朝表」を作成して明朝に提出しようとしていた。その「擬進奏慶皇朝表」に、趙憲は秀吉の來歴について、「源氏之衰、有平秀吉者、包劍入庭、直斬其王之頭、因殺左右人幾數百、其爲篡逆弑之賊無疑」と最も残酷な篡奪者の姿を描写していた。しかし、その「擬進奏慶皇朝表」は結局万曆帝に進呈したかどうか確信できない。
- (16) 例えば、戦争中に明軍の捕虜になった日本兵は秀吉に関する情報を

- 多く明朝に提供した。また、明日両国が講和していた時、情報の交流は以前よりもっと頻繁になった。特に万曆二十一年（一五九三）十二月北京へ講和に來た小西飛（内藤如安）は明政府から厳しい質問を受けいろいろな日本事情および秀吉の情報を報告した。その詳細は宋應昌「經略復國要編」後附「兵部等衙門一本欽奉聖諭事」に記録され、参照されたい。
- (17) 許孚遠、字は孟中、徳清の人、明末有名な道學家。「明史」巻二八三に伝記があり、参照されたい。
- (18) 三木聡「万曆封倭考（その二）—万曆二十四年五月の九卿・科道會議をめぐって—」（北海道大学文学研究科紀要）一一三号、二〇〇四年）一—四九頁。
- (19) 明許孚遠「敬和堂集」「疏・請計處倭酋疏」（陳子龍ほか選輯「明經世文編」巻四〇〇、中華書局、一九六二年）、四三三五下—四三三六上頁。
- (20) 同上、四三三六下頁。
- (21) 同上、四三三六下—四三三七下頁。
- (22) 同上、四三三八上頁。
- (23) 同上、四三四〇上—四三四〇下頁。
- (24) 鄭潔西「秀吉の中国人説について」（或問）一四号、二〇〇八年七月）一五五—一六四頁を参照。
- (25) 「斬蛟記」に関しては、青木正兒「支那戯曲小説中の豊臣秀吉」（一九二七年二月号の「黒潮」、のち「江南春」（弘文堂書房、一九四一年）に収録）一〇五—一〇頁、嚴紹璽「明清時代日人豊臣秀吉為題材の小説戯劇」〔中日古代文学関係史稿〕（湖南文芸出版社、一九八七年）三〇四—三〇八頁、王勇「海彼の寇—海賊から妖怪へ—」（中国史のなかの日本像）（農山漁村文化協会、二〇〇二年）二〇四—二〇八頁などの論考があり、参照されたい。
- (26) 「斬蛟記」で、著者は自分を主人公として、その名前、身分について何度も触れている。更に、記に自分の退官を要求した上奏文も収録した。

- (27) 孟森「袁了凡斬蛟記考」(『心史叢刊』三集、沈雲龍主編「近代中国史料叢刊續編」第九四輯、「台北」文海出版社、一九八二年)、一頁。
- (28) 同上、三、四頁。
- (29) 明沈德符「萬曆野獲編」(中華書局、一九五九年)卷一七「兵部・斬蛟記」、四四一頁。
- (30) 王錫爵、明太倉人、万曆時期的首席大学士、故に「萬曆野獲編」では「太倉相公」としるされる。
- (31) 曇陽大師、明太倉人、王錫爵の娘王蕙貞。出家して曇陽子と号す。当時の学者王世貞は「曇陽大師伝」(王世貞「弇州山人統稿」卷七八所収)を作り、王蕙貞の事蹟を記述した。
- (32) 孟森「袁了凡斬蛟記考」(『心史叢刊』三集、沈雲龍主編「近代中国史料叢刊續編」第九四輯、「台北」文海出版社、一九八二年)、一頁。
- (33) 許真君斬蛟の話については、劉守華「許真君斬蛟伝説的由来及其価値」(『中国道教』、一九九八年第二期)二七、三〇頁を参照された。
- (34) 同上。
- (35) 同上。
- (36) 同上。
- (37) 同上、一、二頁。
- (38) 同上。
- (39) 同上。
- (40) 同上。
- (41) 鄭潔西「秀吉の中国人説について」(『或問』一四号、二〇〇八年七月)一五五、一六四頁を参照。
- (42) 宋李昉ほか「太平広記」(『台北』新興書局、一九六二年)卷一九三「豪俠・蚪髯客」、六七二上、六七三上頁。
- (43) 明陳忱「水滸後伝」(上海古典文学出版社、一九五六年)。
- (44) 明董穀「董漢陽碧里後集雜存」(『北京圖書館古籍珍本叢刊』第一〇四册、書目文獻出版社、一九八八年)「斬蛟」篇、一六六上、一六六下頁。

- (45) 王勇「中国史の中の日本像」(農山漁村文化協会、二〇〇二年)、二一六頁。
- (46) 明宋應昌「經略復國要編」(『四庫禁燬書叢刊』史部第三八册、北京出版社、二〇〇〇年)卷四「報石司馬書」(万曆二十年(二五九二)十二月初四日)、七四上頁。
- (47) 「明神宗實録」(『台北』中央研究院歷史語言研究所、一九六六年)卷二六二、万曆二十一年(二五九三)七月丁卯(二十五日)、四八五八、四八五九頁。
- (48) 明許孚遠「敬和堂集」(『疏・請計處倭酋疏』(陳子龍ほか選輯「明經世文編」卷四〇〇、中華書局、一九六二年)四三三五上頁に、「臣於万曆二十年十二月内欽奉簡命、巡撫福建地方。入境之初、據名色指揮沈秉懿、史世用先後見臣、俱稱奉兵部石尚書密遣前往外國打探倭情。臣看得沈秉懿「沈丙懿」老而黠、不可使、隨令還報石尚書」とあり、沈丙懿が結局日本へ派遣されなかったことが明らかである。
- (49) 孟森「袁了凡斬蛟記考」(『心史叢刊』三集、沈雲龍主編「近代中国史料叢刊續編」第九四輯、「台北」文海出版社、一九八二年)、七頁。
- (50) 潘士藻、字は去華、号は雪松、明婺源の人。当時には尚宝司少卿を務めていた。彼の事跡については「明史」卷三四の伝記を参照。
- (51) 孟森「袁了凡斬蛟記考」(『心史叢刊』三集、沈雲龍主編「近代中国史料叢刊續編」第九四輯、「台北」文海出版社、一九八二年)、三頁。
- (52) 明沈德符「萬曆野獲編」(中華書局、一九五九年)卷一七「兵部・斬蛟記」、四四一頁。
- (付記) 本稿は、平成二十年度日本学術振興会科学研究費助成金「明代万曆時期の中日関係史の研究」による成果の一部である。また関西大学アジア文化交流研究センターの松浦章先生から多大なご教示を賜り、併せて感謝申しあげたい。

(関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程)